講　演　録

学習院大学計算機センター　第 29 回特別研究 研究会
日時　平成 30 年 2 月 20 日（火）
場所　学習院大学　西 2 号館 3 階　302 教室

ICT を活かしたスポーツ情報戦略

日本スポーツアナリスト協会　代表理事　渡辺啓太氏

近年、スポーツの世界においてチームを勝利に導くために重要なのは、選手や監督の能力だけではなくなった。かつて“東洋の魔女”と称された日本女子バレーボールも、1980 年までを全盛期とし、それ以降右肩下がりに成績が落ち込み、2000 年シドニーオリンピックには出場すらかなわなかった。しかし、2003 年に再浮上し、2010 年には世界選手権でのメダル獲得、2012 年にはロンドンオリンピックで銅メダル獲得と、日本女子バレーの成績は V 字回復を遂げた。その背景には、かつての日本女子バレーには取り入られていなかった、データ分析やテクノロジーを活用した情報戦略があった。本講演会では、情報戦略をたてるために重要な役割を担うスポーツアナリストの第一人者・渡辺啓太氏に登壇いただき、身近なスポーツの裏側でどのような分析がなされているのか、また、近年 ICT がどのようにスポーツの世界に影響を及ぼしているのか講演いただいた。

バレーボールの試合で近年よく目にするのは、iPad を持っている監督の姿や、コート外でパソコンを操作するスタッフの姿である。このスタッフこそがアナリストであり、アナリストが監督に情報を送っている。リアルタイムに試合の状況を分析し、インカムで監督に情報提供している。また、試合中でなくても、例えば試合前のミーティングなどで、その場その場に合わせた有用な情報を提供する。この情報とは、素材となる単純な元データを、ML 分析、評価、解釈して生まれた情報である。適宜、意思決定者となる監督や選手の助けとなるよう、有用な情報を戦略的に活用することが、情報戦略なのだ。

情報戦略活動は、収集、分析、提供という流れで行われる。収集に関しては、データやテキスト、映像、記者会見でのコメントや、マスメディアに出る情報など、あらゆる媒体を通して収集を行っている。

ICT の進歩により、今まで取れなかったデータが簡単に大量に取得できるようになってきた。これらは戦略をたてるのみならず、選手の練習にも活用され、苦手の克服に一躍買っている。更に、試合をする選手や、選手たちを支えるスタッフだけではなく、スポーツを見る観客にも恩恵が得られるようになってきた。例えばバレーボールのサーブの速さがわかったり、テレビで試合を見ながらタブレットで自分だけのデータが見られたりと、スポーツファンが楽しむために ICT が利用されてきているのだ。このようなマルチユース化が現在のトレンドとなっている。

2020 年の東京オリンピック開催まで残り 2 年となった。このタイミングで、今回の講演を聞けたのは非常に貴重な体験であった。今後スポーツを観戦するポイントが変わるのは

間違いないだろう。

＜略歴＞
「IT をスポーツに活用すること」を志して大学時代に独学でアナリスト活動を開始。在学中に全日本女子バレーボールチームのアナリストに抜擢され、以後 10 年以上にわたり情報戦略活動を担当し、2008 年北京、2012 年ロンドン、2016 年リオデジャネイロと 3 度のオリンピックを日本選手団役員として支援。2010 年には世界で初めて iPad を用いた情報分析システムを考案・導入し、 32 年ぶりとなる世界選手権でのメダル獲得、2012 年のロンドンオリンピックでは 28 年ぶりとなる銅メダル獲得に貢献した。全日本チームの支援を続ける傍ら、アナリスト育成セミナー等を開催して後進育成にも注力。2014 年からは競技の枠組みを超えたスポーツアナリストの連携強化及び価値向上を目指して日本スポーツアナリスト協会を創設し、代表理事として活動している。主な著作は『なぜ全日本女子バレーは世界と互角に戦えるのか』（東邦出版 2012）、『人はデータでは動かない－心を動かすプレゼン力－』（新潮社 2014）など。
一般社団法人日本スポーツアナリスト協会代表理事／公益財団法人日本バレーボール協会ハイパフォーマンス戦略担当、男子強化委員会主事、アスリート委員会主事／公益財団日本オリンピック委員会 JOC 選手強化本部情報・医・科学専門部会　情報・科学サポート部門メンバー／総務省スポーツ×ICT ワーキンググループメンバー／桐蔭横浜大学健康政策学部スポーツテクノロジー学科 講師